

# 編 集 後 記

何はともあれ第一号を皆さんのお手元に送るを得た。不満、不足、意に満たない多くの點を含んではいるが、それでも一應の形を作り出すに至つた。今後の變らない御叱責と御協力によつて廣く道孵化行政への地歩が築かれて行くであらうことを期待してをります。

歴史はいろんな形で進められて行く。既に二千年前に知られ、行はれていたことを現在尙知らずに努力している場合がある。資源保護を誰しも不必要だとは思はないが、鮭の資源保持が何の様に行はれるのかわからない人は多い。ましていろんな魚種に於ては勿論であらう。又孵化技術者でも簡単な基礎知識を知らない爲に大きなあやまりをかすことはまゝある。いわゆる「知らざることを

知り」「故きを温める」に活字程度利なものはない。いろんな意味でこの小冊子が有効に使はれる様、知る人は教え、知らない人は聞き、編集者はこの間に立ち諸賢兄の御指導を得て最も適切に孵化行政の指針たらしめる編集がなし得ること、成功之に過ぐるはないであらう。

こうした意味で試験、技術の両相談室は大いに御利用下さい。

「支場巡り」を計画して第一回を天塩支場に考えましたが原稿が頂けず、止むなく次號に廻すこととなりました。この計畫は全事業場にまで進めようと思つて居りますので進んで原稿をお寄せ下さる様お願いします。

この雑誌は編集委員會によつて企画し、記事審査委員會が原稿の審査

をして出来上ります。記事審査は關係課長と場長がこれに當り、編集委員は各課からそれ／＼新莊（庶務）逸見（企画）菊池（事業）江口（調査）の四氏を出して構成されています。題名やこのしくみについては編集委員の方々に御苦勞をかけてをります。然しこうした民主的な運営はその人達の苦心を基礎にして必ずいものに育て、行くだろうと思えます。

（秋庭）

昭和廿五年一月十日發行  
毎月十日刊行

札幌市外中の島

發行所 北海道水産孵化場

電話五三三五番

發行者 木村 錠 郎

札幌市南六條西三丁目

印刷所 南産業株式會社

電話五〇四二番

謹  
賀  
新  
年

北海道水產孵化場

場員一同